

## 千代の古道（三）

土田龍太郎

芹川そもいづくにありしや、今しかと定めがたきはさてもこそあれ、千代の古道今たえてあるまじとはむげに思ひ棄つべからず。その上の人の踏みかよひしかしこき道の跡、いやはるかに辿りゆかみやみなましやは。

古道といへるにつきてやがて思ひおこさるるは

奥山のおどろが下も踏みわけて

道ある世ぞと人に知らせむ

と詠みたまへる後鳥羽院の御製にほかならず。増鏡にはおどろが下といへる巻ありて、この院の敷島の道によせたまへりし志なのめならで、歌合に撰集をはじめて大和歌につきてくさぐさの御營みありしさまを述ぶることつばらなればいともめでたけれど、そこにて右の一首をも引きたり。

新古今集に入りたるこの御製、まことはかの集の撰録と竟宴のありし元久二年にはおくられて、承元三年の住吉歌合のをりにはじめて詠みたまひけること詞書にてしるければ、後に加へりし切入れ歌なるにまぎれなきなり。

承元二年といへるはかの承久三年の兵亂に先立てること四年にすぎざれば、この御製に關東調伏の叡慮をも祕めたまひしやいなやせちに知らまほしきはさることなれども、これにつきておのが浅き心もていたづらに思ひはからはむもいかなればいささかも言はでやみなむにはしかじかし。

わが國がらのたふとき道あれど、なべての人のはや忘れはてぬるままに、今やおどろが下に隠れたるにてありやなしやになりたることいみじくうれたければ、たとへしほからたち荊棘踏みしだきつつよしやうきめにあはむとも、いかで尋ね明めあきらでやはあらむ。かかる大御心を右の御製にこめたまひしこと疑ふべきにあらねばかしこきことよなしとぞいひつべき。

後鳥羽院のここに詠みたまひしおどろが下の道、公おほやけの政まつしむの道々しき方のみを指せりとは思ほえず、はた敷島の大和歌におほしきぎりしにもあらざるべし。神ながら神さびたまひし遠つ世のひじりのみわぎ、歌に史ふみに傳はり來ぬれど、かかる昔の畏きあとを、石いその上かみ古きを今に尋ねつついかで現し世にまた踏み啓ひらかでやはあらむ、かかるかたき御心掟を右の一首に伺ひまゐらせなばおほかたはたがはざらまし。

隱岐院の御訓へにまかせておどろが下の千代の古道のこといや遠く考へもてゆかば、つ

ひに思ひ至らであるべからぬは可牟奈我良の一言にぞありける。そもいかなるくすしきさかひをかく呼びたるにやあらむ、ゆかしきこといふはかりなし。なべてのものえ測りがたきこの言の葉につきて、近き世の賢き物知り人の論あげつちひさまさまありげなれどもいづれあたりとも決めかねつれば、たよりなきままにうちやみなむほかすべなきぞうたてき。

されどここにゆめおろそかに見るまじきは、天萬豊日天皇の大化三年四月朔日に下し

たまへる詔みことのりにて、今も孝徳紀に載りたるこの詔の本文、惟神の二文字もて始まりたれど、その下にただに續ける惟神の釋義ありて、夾註のごとくに記されたり。

この註記の差し入れられしは、書紀本文の定まりぬる後なることをさをさ疑ふべからず。さはれこの惟神の釋義、下れる世のなまさかしら人のしわざにてはよもあるまじくて、いと古くより行はれたりし箴言のたぐひにさへ見ゆれば、重くたふときこいはむかたなし。神世にもかよへる深きおもむきのこまれるにまぎれなければかまへてなほざりに見すぐすまじくねもころにけみせではあるべからず。

書紀の寫本の異なるにしたがひてこの夾註の文また同じからず、讀みやう兩(ふた)とほりに傳はりたりと言ひつべけれど、今それぞれをしばらく甲乙と標(しる)して左のごとくに掲げなばことたりなむ。

〔甲〕 惟神者謂隨神道。亦謂自有神道也。

惟神とは神の道に隨ふを謂ふ。またおのづから神の道有るを謂ふ。

〔乙〕 惟神者謂隨神道亦自有神道也。

惟神とは神の道に隨ふもまたおのづから神の道有るを謂ふなり。

ここに引ける甲と乙のたがひめ、亦の字の下にさらに謂の一字ありやなしやにすぎざれば、さしも心とめでもよかりぬべく見ゆれどもさにはあらず。このわづか一字のありなしにて夾註の文意いたく距りぬべければさらにゆるがせにすまじきなり。

甲と乙といづれを正しとせむ、論ひげにさまさまにてはてしもなかるべければ、おのが拙き思ひ測りを左にあらあら述べてやみなむほかすべなきにいたり。

おのづからなる神の道ありて、人はただその道のまにまにかまほしといへる甲の説きさま、いとも平かにてむべむべしく聞ゆれば、ひとわたりは誤りなきにたれども、これを乙と並べ見るときは、なにとやらむいまだ淺々あやふしくてあかずおぼゆるところなきにあらず。

かへりて乙の言ふところ、いかさま心深くよしありげなれども、ここにて神の道に隨ふもまたおのづから神の道ありと述ぶるは、そもいかなることわりを顯せるやらむ、語句のままなだらかに解きうまじければ文意とみには悟りがたきぞわりなき。

神の道と云ふは、これなむそれとて定かに示すまじく、はたかねて遠方まで一すぢにえ見はるかすものとも思ほえず。葦原の水穂の國は神なから言擧げせぬ國と古語ふるごとに云へれど、鈴屋大人これにつきて

まことは道あるがゆゑに道てふことなく、道てふことなければ道ありしなりけり

と直毘靈なほひのみたまに説けるはげにさこそと思ひ知らるるなり。同じ鈴屋大人、孝徳紀よりは右に掲げし乙につきて解けることいとつばらなればここに引かではあるべからず。

神の道に隨ふとは、天の下治めたまふ御しわざは、ただ神代より有りこしまにまに物したまひて、いささかもさかしらを加へたまふことなきをいふ。さてしか神代のまにまに大らかに知ろしめせば、おのづから神の道はたらひてほかにもとむべきことなきを自ら神の道ありとはいふなりけり。

ここに心とめであるべからざるは、おのづから神の道のはたらきて、と云へる一句にて、この一句もて、人のしわざの神の道に隨ふときまたすすろに神の道のくすしきはたらきのしるきことに説き及べるにいたり。鈴屋翁の説けりしもおもむきに沿ひて考へもてゆけば、神ながらとは、いつも變らず舊きままにしかと止まれるものにてはなくて、日に新に日々に新にまた日に新たなるものなるべければ、このはたらきげに千早ぶる神の御魂のいやちこなるさきはひと言ひつべくして、あやしくかしこきこと上なきなり。

世下らば年にそへ日にそへてなべての物事の降ちゆき賤しくなりもてゆかむは、避さりがたき理ことわりなれども、あながちに佛家の説になづみて惟神の道の衰へのみを嘆きわづらふべきにしもあらず。昔のあとをまた尋ね、古きを今に興さむと思ひ立ちて日々はげみゆかむこそなかなかいくへにもまさりぬべけれ。

代下れりとてみづから賤しむべからず。天地あめつちの始めは今日を始めとする理ことわりあり。

と言ひおけるかの北畠准後の教へ訓しいとも尊く頼もしと思はでやはあらむ。

(令和三年五月二十日受附)